劇団うりんこ＋三浦基＋クワクボリョウタ

『幸福はだれにくる』

Theater Urinko + MIURA Motoi + KUWAKUBO Ryota

“Afraid of Troubles - Cannot Have Luck”

8.16 Fri – 18 Sun
愛知県芸術劇場 小ホール
Mini Theater, Aichi Prefectural Art Theater

9.21 Sat – 22 Sun
豊田市民文化会館 大ホール
Main Theater, Toyota City Cultural Hall

情の時代
あいち
トリエンナーレ
2019
AICHI TRIENNALE 2019:
Taming Y/Our Passion

Photo: Yoshiyasu Hattori

設立以来45年の歴史をもつ名古屋の児童・青少年向け劇団うりんこ。「うりんこ」とは「猪の子供」を意味する。劇団専用劇場や小中学校での公演は年間450本を超え、東海地方の多くの子供達に演劇の楽しさを届け続けてきた。

今回あらたに発表する新作は、『森は生きている』でも有名なロシアの児童文学作家マルシャークの戯曲『幸福はだれにくる』。演出には『お伽草紙／戯曲』（10年）でもタッグを組んだ 三浦基（地点）。美術にはメディアアーティストのクワクボリョウタを迎える。「憂(う)き目(め)つらい目ふしあわせ」「幸福はだれにくる？」との呪文とともに展開する舞台は、光と影を駆使した幻想的なもの。誰かが不幸を引き受けねば、誰かが幸せにはなれない―？そんな世界の構図とそれとたたかう知恵とユーモア、子供も大人も一緒に楽しめる極上の寓話劇だ。

With a 45-year history since its foundation, Theater Urinko is a Nagoya company that specializes in productions for children and youth. It takes its name from the Japanese word urinko, meaning “wild boar piglet.” The company holds over 450 performances each year at its own dedicated theater and at schools, bringing the joy of theater to many children in the Tokai region for quite some time.

For their new work at Aichi Triennale 2019, they will perform the play *Afraid of Troubles – Cannot Have Luck* by Russian children’s author Samuil Marshak, who is best known for *Twelve Months*. The production invites Motoi Miura of the theater company Chiten––who worked with Theater Urinko on *Otogizōshi/Gikyoku* (The fairy tale book of Dazai Osamu: a drama) in 2010—as director, and media artist Ryota Kuwakubo as set designer. This is a fantastic production that makes masterful use of light and shadow, the story unfurling with the spell “Misery, suffering, unhappiness, who will happiness come to?” (The Japanese title is taken from the second half of this spell—“who will happiness come to?”.) Is one person’s happiness possible only when someone else takes on their unhappiness? This is an exceptional parable play with the wit and humor to match the world it constructs, sure to entertain children and adults alike.

劇団うりんこ

劇団うりんこ

1973年結成
愛知県拠点

主な作品発表

2013 『罪と罰』うりんこ劇場、愛知
2010 『お伽草紙/戯曲』うりんこ劇場、愛知
1993 『フタをあければ夏のかぜ』名古屋市芸術創造センター、愛知
1988 『宮澤賢治大運動会』うりんこ劇場、愛知
1979 『冒険者たち』名古屋市民会館中ホール、愛知

Theater Urinko

Founded in 1973
Based in Aichi, Japan

Selected Works

2013 *Crime and Punishment*, Urinko Theater, Aichi, Japan
2010 *Otogizōshi/Gikyoku* (*The fairy tale book of Dazai Osamu: a drama*), Urinko Theater, Aichi, Japan
1993 *Summer Breeze from the Lid*, Nagoya City Performing Arts Center, Aichi, Japan
1988 *Kenji Miyazawa - Athletic Meet*, Urinko Theater, Aichi, Japan
1979 *Adventurers*, Nagoya Citizens’ Auditorium, Aichi, Japan

三浦 基

1973年福岡県生まれ
京都府拠点

地点代表、演出家。99年より2年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに滞在する。2001年帰国、地点の活動を本格化。05年東京から京都へ拠点を移す。これまでの代表作にチェーホフ作『三人姉妹』、イェリネク作『光のない。』、『スポーツ劇』など。13年、アトリエ「アンダースロー」開場。11年度京都市芸術新人賞、17年読売演劇大賞選考委員特別賞、ほか受賞多数。著書に『おもしろければOKか？ 現代演劇考』（五柳書院）、『やっぱり悲劇だった「わからない」演劇へのオマージュ』（岩波書店）。

Photo: Hisaki Matsumoto

主な作品発表・受賞歴

2017 第24回読売演劇大賞、東京、選考委員特別賞受賞
2015 『三人姉妹』KAAT神奈川芸術劇場、神奈川
2012 『光のない。』東京芸術劇場、東京
2011 京都市芸術新人賞、京都、京都市芸術新人賞受賞

MIURA Motoi

Born 1973 in Fukuoka, Japan
Based in Kyoto, Japan

Miura Motoi is a representative, and the director, of Chiten. He spent two years in Paris as part of the Japanese Agency for Cultural Affairs’ Artist Overseas Training program. Upon his return to Japan in 2001, Miura got up and running with Chiten, which moved from Tokyo to Kyoto in 2005. Representative works include Chekhov’s *Three Sisters*, and Jelinek’s *Kein Licht* (*No light*) and *Sports Play*. In 2013 Chiten opened the studio Under-Throw. He has been the recipient of many awards, including: The Kyoto City Award for New Artists in 2011; and the Yomiuri Theater Award Special Jury Prize in 2017. His publications include: *Omoshirokereba OK ka? Gendai Engekikō* (Is just being interesting OK?: A meditation on contemporary theater, Goryu Books), and *Yappari Higeki Datta. “Wakaranai” Engeki e no Omāju* (Iwanami Shoten).

Selected Works & Awards

2017 24th Yomiuri Theater Award, Tokyo, Japan, Special Jury Prize
2015 *Three Sisters*, KAAT Kanagawa Arts Theatre, Kanagawa, Japan
2012 *Kein Licht*, Tokyo Metropolitan Theatre, Tokyo, Japan
2011 Kyoto City Award for New Artists, Kyoto, Japan, Kyoto City Award for New Artists

クワクボリョウタ

1971年栃木県生まれ
岐阜県／東京都拠点

アーティスト、IAMAS准教授。現代美術を学んだ後、1998年からエレクトロニクスを使用した作品制作活動を開始。デジタルとアナログ、人間と機械、情報の送り手と受け手など、様々な境界線上で生じる事象をクローズアップする作品によって、「デバイス・アート」とも呼ばれる独自のスタイルを生み出した。2010年発表のインスタレーション《10番目の感傷（点・線・面）》以降は、観る人自身が内面で体験を紡ぎ出すような作品に着手している。生活と実験のアートユニット、パーフェクトロンの一員としても活動している。

Courtesy of New Indian Express

主な作品発表

2017 札幌国際芸術祭2017、北海道
2016 第8回恵比寿映像祭「動いている庭」東京都写真美術館、東京
2014 コーチ=ムジリス・ビエンナーレ2014「Whorled Explorations」コーチ（インド）
2013 「Mono no Aware」エルミタージュ美術館、サンクトペテルブルク（ロシア）
2011 「世界制作の方法」国立国際美術館、大阪
2004 「Nam June Paik Award」フェニックスハーレ、ドルトムント（ドイツ）

KUWAKUBO Ryota

Born 1971 in Tochigi, Japan
Based in Gifu & Tokyo, Japan

Kuwakubo Ryota is an artist, and Associate Professor at the Institute of Advanced Media Arts and Sciences (IAMAS). After studying contemporary art, he started creating work using electronics from 1998. His unique style, “device art,” emerged from work that takes a close-up view of phenomena arising at the various boundaries between digital and analog, human and machine, information transmitters and receivers, etc. Since his installation *The Tenth Sentiment*, first exhibited in 2010, Kuwakubo has focused on work of a kind in which visitors weave their own experience. He is also active as a member of Perfektron, an art unit exploring life themes and experimentation.

Selected Works

2017 Sapporo International Art Festival 2017, Sapporo, Japan
2016 Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2016, *Garden in Movement*, Tokyo Photographic Art Museum, Tokyo, Japan
2014 Kochi-Muziris Biennale 2014, *Whorled Explorations*, Kochi, India
2013 *Mono no Aware*, State Hermitage Museum, Saint Petersburg, Russia
2011 *Ways of Worldmaking*, The National Museum of Art, Osaka, Japan
2004 *Nam June Paik Award 2004*, Phoenixhalle, Dortmund, Germany

えんしゅつノート

みうらもとい

子どものころ、大人になったら何になりたいかと聞かれるのが、ぼくにとってとても困ったもんだいでした。バスのうんてんしゅ、と答えたことをよくおぼえています。たまたまその日にバスに乗ったから、そう答えたのでした。電車なら電車のうんてんしゅ、だったのでしょう。プロ野球のせんしゅになりたいとは大それて言えず、お父さんの仕事をまねして答えるのも、ちょっとかんたんだな、と感じていたのだと思います。つまり、ぼくは何になりたいのかをわからない子どもでした。たぶん、あこがれという気持ちが少ないにんげんでした。今から思うと、げんじつしゅぎ者だったのでしょう。

マルシャークというロシアの作家が書いた、今日の劇では、男の人たちは、木こりと王様と兵隊などがとうじょうします。女の人たちは、そのむすめたちです。他には人ではなく「憂き目（うめ）」というやくびょう神のような者がいます。もし、ぼくが子どものころにこの劇を見たとしても、ここにとうじょうする人たちの中でなりたいと答えるには、さすがにむずかしい大人たちばかりだな、と思います。兵隊になりたい、と答えたら悲しい子どもでしょうし、王様になりたいと答えたら病院につれていかれるかもしれません。では、木こりにしたとして、じっさい、この木こりはとても不幸でため息ばかりついているので、なかなか大変そうです。むすめたちにしても何をしている人たちなのかよくわかりません。とにかくここにとうじょうする人たちは、お金で不幸をかいけつしようとします。何かをお金で売って不幸からのがれようとするのです。

ということで、今日の劇にとうじょうする大人たちに、あこがれを持つことができないという点で、げんじつしゅぎ者のおはなしだと言えます。

ぼくが子どものころにこの劇を見ていたら、ほっとして笑っていたのかもしれないと思うと、マルシャークという作家が、これを子どもたちに見せるために書いたわけがわかるような気がするのです。

びじゅつノート

クワクボリョウタ

ぼくは、ふだんはぶ台作品ではなく、「インスタレーション」とよばれる美じゅつ作品を作っている者です。ゆかに色々な日用品を置いて、その間にライトをつけた鉄道もけいを走らせると、それらの物のかげが部屋にうつし出されて、まるで旅をしているような風景が広がる、そんな作品を作っています。

ぼくが作品に使う日用品はみなさんもよく知っている見なれた物ばかりです。例えばハンガーとかブラシとかカゴなど、そこらで売っているなんの変てつも無いものです。それらを工夫してならべ、そのかげをうつし出すと、元のすがたとかけはなれた風景に変わります。ぼくはどこでもないけどどこかにあるような、たしかに以前見たことがあるけど思い出せないような、そんな風景に心ひかれるのです。ですからぼくの作品を見る時には、各々が自分のけい験したことのある風景を思い出しながら見てくれたらいいと思っています。

いつもは作品はひとりで作ります。最初に全体を計画し終わってからその通りに物を置いたりするのではなく、光の電車を走らせ、うつし出されるかげを見ながら、物を置いたり動かしたり取りのぞいたり、時には線路の位置を変えたりしてじょじょに全体を決めていきます。ぼくがそんな風に作っている様子を他の大人が見たら、「まるで子どもがおもちゃで遊んでいるようだな」と思うにちがいありません。大の大人がひとりでゆかにはいつくばって、むちゅうで電車を動かしたり、まわりに物をならべたりしているんですからそれも無理もないな、とは思います。

でもぼく自身は、はたして自分が本当に子どものように遊べているのだろうか？と考えると、その自信が持てません。人はくらしや学校の中で、色々なことを学びます。それを通して「目的」や「分別」など、世の中で生きていくために必要な、物事や考えを整理する方法を身につけます。これらはたしかにとても役に立つのですが、強い力を持っていて一度身につけるとそれからのがれることがとてもむずかしいのです。そしてその便利さと引きかえに真っ先に失ってしまうのが遊ぶことではないかと思うのです。

この公えんを観に来たみなさんは、もう「目的」や「分別」が何のことか理かいしていることでしょう。それでも子どもとして遊ぶことだって、まだわすれていないはずです。ぼくにはもう本当の意味では思い出せないので、みなさんに聞きたいのですが、遊ぶということは「目的」や「分別」とのおにごっこのようなものではないですか？だからみなさんはケンカになったり大人たちにしかられるかもしれないのに「いたずら」や「ずる」が楽しくてやめることができないのではないですか？

今回ぼくは初めてぶ台作品に関わりました。えん出家のみうらさんの指じで、ありったけの物をぶ台に置いて、うりんこのみなさんがめいめいにその周りを歩いたりセリフを言ったりし始めました。そんなやり方は初めてだったので最初はびっくりしましたが、やがて「ハハン」と思い、それならこうしてみようああしてみようという風にやり始めて気づいたらこうなっていたのです。その時の様子をみなさんが見たらどう思ったでしょうね。

あらすじ・はいやく

あるところに年老いた木こりがおりました。木こりは「憂き目つらい目ふしあわせ」というやくびょうがみにとりつかれたせいで、どんなに働いてもびんぼうなまま。ロベらしのために、めいのナースチャを金持ちのおとしよりにとつがせようと思っていますが、ナースチャには兵士の恋人がいます。「憂き目つらい目ふしあわせ」からのがれるには、なにか物を売り、その「おまけ」として、このやくびょう神をつけること。木こりは、なんと王さまにそれをなすりつけますが、こんどは王国がききにおちいってしまいます。やくびょう神のそんざいに気がつき、なんとかのがれようとする王さま。今度はだれに「憂き目つらい目ふしあわせ」をおしつければいいのでしょう。だれかにおしつけなければ、幸福にはなれないのでしょうか。

王さま
原田邦英（はらだ くにひで）

憂き目つらい目ふしあわせ
柴田早苗（しばた さなえ）

木こり
内田成信（うちだ しげのぶ）

兵士
牧野和彦（まきの かずひこ）

ナースチャ
青山知代佳（あおやま ちよか）

アンフィーサ
越賀はなこ（こしか はなこ）

さくしゃについて

この劇のさくしゃのサムイル・マルシャーク（1887〜1964）は、ロシアうまれの詩人でじどう文学者です。ユダヤ人としてうまれ、はくがいをけいけんしながらも、はやくから詩のさいのうをはっきしました。中学じだいには、『どん底』で知られる作家、ゴーリキーのしえんも受けていたそうです。やがて詩やほんやくをはっぴょうするようになり、イギリスにりゅうがくして、シェイクスピアやイギリスのみんわについてべんきょうしました。1917年のロシアかくめいのあとは、ロシア南部のクラスノダール市に、せんそうでいえやかぞくを失った子供たちを助けるしせつ“こどものまち”をつくり、その劇場でじょうえんするじどう劇を書きました。
マルシャークのじどう劇は、ロシアのみんわやでんせつ、ふうしゅうをふんだんにとりいれたものです。とくに『森は生きている（原題：十二月）』は、ロシアをだいひょうする劇団、モスクワ芸術座でじょうえんされ、日本でも俳優座や劇団仲間など、いろいろな劇団で長くじょうえんされています。

Photo: Yoshiyasu Hattori

Text: Samuil Marshak
Translation: Yoshiko Yuasa (Iwanami Shonen Bunko)

Direction: Motoi Miura (Chiten)
Set Design: Ryota Kuwakubo

Stage Design: Itaru Sugiyama
Costume Design: Kyoko Domoto
Costume: Theater Urinko Cosutume Production Department
Light: Sachiko Mihara
Sound: Asao Shikata
Production Managers: Yoko Agata, Takayuki Hiramatsu

Cast: Kunihide Harada
Sanae Shibata
Shigenobu Uchida
Kazuhiko Makino
Chiyoka Aoyama
Hanako Koshika

Video Documentation: Daisuke Yamashiro
Photography: Masahiro Hasunuma

Curator: Chiaki Soma (Aichi Triennale 2019)
Production Manager: Sayuri Fujii (Aichi Triennale 2019)
Production Coordinator: Satomi Muramatsu (Aichi Triennale 2019)

Produced by Aichi Triennale 2019 and Theater Urinko
Presented by Aichi Triennale Organizing Committee
Co- Presented by Aichi Prefectural Art Theater (Nagoya),
Toyota City cultural promotion foundation (Toyota)

作: サムイル・マルシャーク
訳: 湯浅芳子 (岩波少年文庫)

演出: 三浦基 (地点)
美術: クワクボリョウタ

舞台美術: 杉山至
衣裳: 堂本教子
衣裳製作: 劇団うりんこ衣裳部
照明: 御原祥子
音響: 四方あさお
制作: 安形葉子、平松隆之

キャスト: 原田邦英
柴田早苗
内田成信
牧野和彦
青山知代佳
越賀はなこ

記録映像: 山城大督
記録写真: 蓮沼昌宏

キュレーター: 相馬千秋 (あいちトリエンナーレ2019)
制作統括: 藤井さゆり (あいちトリエンナーレ2019)
制作: 村松里実 (あいちトリエンナーレ2019)

製作　あいちトリエンナーレ2019、劇団うりんこ
主催　あいちトリエンナーレ実行委員会
共催　愛知県芸術劇場 (名古屋公演)
公益財団法人豊田市文化振興財団 (豊田公演)

「あいちトリエンナーレ2019」パフォーミングアーツ
AICHI TRIENNALE 2019 / Performing Arts

キュレーター Curator
相馬千秋 SOMA Chiaki

アシスタントキュレーター Assistant Curator
藤井さゆり FUJII Sayuri

コーディネーター Coordinator
清水翼、村松里実 SHIMIZU Tsubasa, MURAMATSU Satomi

テクニカル・ディレクター Technical Director
尾﨑聡 OZAKI So

票券 Ticket Administration
山﨑佳奈子 YAMASAKI Kanako

翻訳 Translation
Art Translators Collective
(相磯展子、ベン・ケーガン、リリアン・キャンライト)

Art Translators Collective
(AISO Nobuko, Ben CAGAN, Lillian CANRIGHT)

編集・執筆 Editor/Writer
鈴木理映子 SUZUKI Rieko

編集: 鈴木理映子
デザイン: コバヤシタケシ (SURFACE)
印刷・製本: 藤原印刷

あいちトリエンナーレ2019 情の時代
2019年8月1日 [木] ー10月14日 [月・祝]

主な会場: 愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、名古屋市内のまちなか (四間道・円頓寺)
豊田市 (豊田市美術館及び豊田市駅周辺)
芸術監督: 津田大介 (ジャーナリスト/メディア・アクティビスト)

主　　催: あいちトリエンナーレ実行委員会
助　　成: 損保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)
公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド
一般財団法人地域創造

AICHI TRIENNALE 2019: Taming Y/Our Passion
August 1 (Thursday) to October 14 (Monday, public holiday) , 2019

Main Venues: Aichi Arts Center, Nagoya City Art Museum, Nagoya City (Shikemichi and Endoji)
Toyota City (Toyota Municipal Museum of Art and venues in the vicinity of Toyotashi station)
Artistic Director: TSUDA Daisuke (Journalist / Media Activist)
Organizer: Aichi Triennale Organizing Committee
Supported by Sompo Japan Nipponkoa Insurance Inc.「SOMPO ART FUND」(Association for Corporate Support of the Arts, Japan:2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture), Association for Corporate Support of the Arts, Japan: 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture, Japan Foundation for Regional Art-Activities

beyond 2020